

こえに だして よみましょう。

いちようの実<sup>み</sup> ③

みやざわけんじ  
宮沢賢治

そしてきょうこそ子どもらがみんないっしょに旅<sup>たび</sup>にたつ  
のです。おかあさんはそれをあんまり悲<sup>かな</sup>しんでおうぎ形<sup>がた</sup>の  
黄金<sup>きん</sup>の髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>をきのうまでにみんな落<sup>お</sup>としてしまいました。  
「ね、あたしどんなどこへいくのかしら。」ひとりのいちよ  
うの女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>が空<sup>そら</sup>を見<sup>み</sup>あげてつぶやくようにいいました。

「あたしだってわからないわ、どこへもいきたくないわね。」  
もひとりがいいました。

「あたしどんなめにあってもいいから、おっかさんとこにい  
たいわ。」

「だっていけないんですって。風<sup>かぜ</sup>が毎日<sup>まいにち</sup>そういったわ。」  
「いやだわね。」

「そしてあたしたちもみんなばらばらにわかれてしまうん  
でしよう。」

「ええ、そうよ。もうあたしなんにもいらさないわ。」

「あたしもよ。今<sup>いま</sup>までいろいろわがままばっかしいってゆ  
るしてくださいね。」

「あら、あたしこそ。あたしこそだわ。ゆるしてちょうだい。」